説教要旨「イエス様の里帰り」

ルカによる福音書　４章１６～３０節

故郷であるナザレの町の会堂で、イエス様はイザヤ書の言葉を朗読されました。そこでは神様によって遣わされた「わたし」が、捕われている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年＝ヨベルの年を告げることができる、と語っている所です。そしてイエス様は続けて、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と告げたのです。

この言葉にナザレの人々は驚きました。そして、「この人はヨセフの子ではないか」と言うのです。彼らはイエス様の言葉が、『恵み深い』言葉だと認めながら、その言葉を「神の言葉」としてではなく、「ヨセフの子」の言葉としてしか聞くことができずにいるのです。この人々にイエス様は聖書から、神の民であると自負するユダヤ人にではなく、むしろユダヤ人が蔑んでいる異邦人に救いが与えられた２つのエピソードを語りました。それは、イエス様が告げられた“恵み深い言葉”を、ナザレの人々が「ヨセフの子」の言葉として侮っている間に、神様の救いは他の町の人々に与えられていくことを示唆しています。これを聞き憤慨したナザレの人々は、イエス様を崖から突き落として殺そうとしたのです。

聖書において人間の罪は、しばしば神に対する借金になぞらえられます。罪の負債にまみれているわたしたちは、自分の力でその罪を償って自由を得ることができません。なぜならわたしたちは、神様に対しても、隣人に対しても日々罪を重ね、借金が雪だるま式に膨れ上がり、もはや自分の力ではとうてい返済できないくらい大きくなってしまっているからです。

この、罪の負債によって首が回らなくなっているわたしたちのために、神様はその独り子イエス・キリストを遣わして下さいました。イエス様はわたしたちの罪、負債を全て代わって引き受け、肩代わりして支払って下さったのです。それがイエス様の十字架の死です。イエス様はご自分の命を与えて下さることによって、わたしたちのためのヨベルの年を、解放と自由を宣言して下さったのです。

（２０２３・１・２２　説教者：稲垣真実）